

つがるの昔っこ (昔話) 13

化け物寺(猿) (津軽弁)



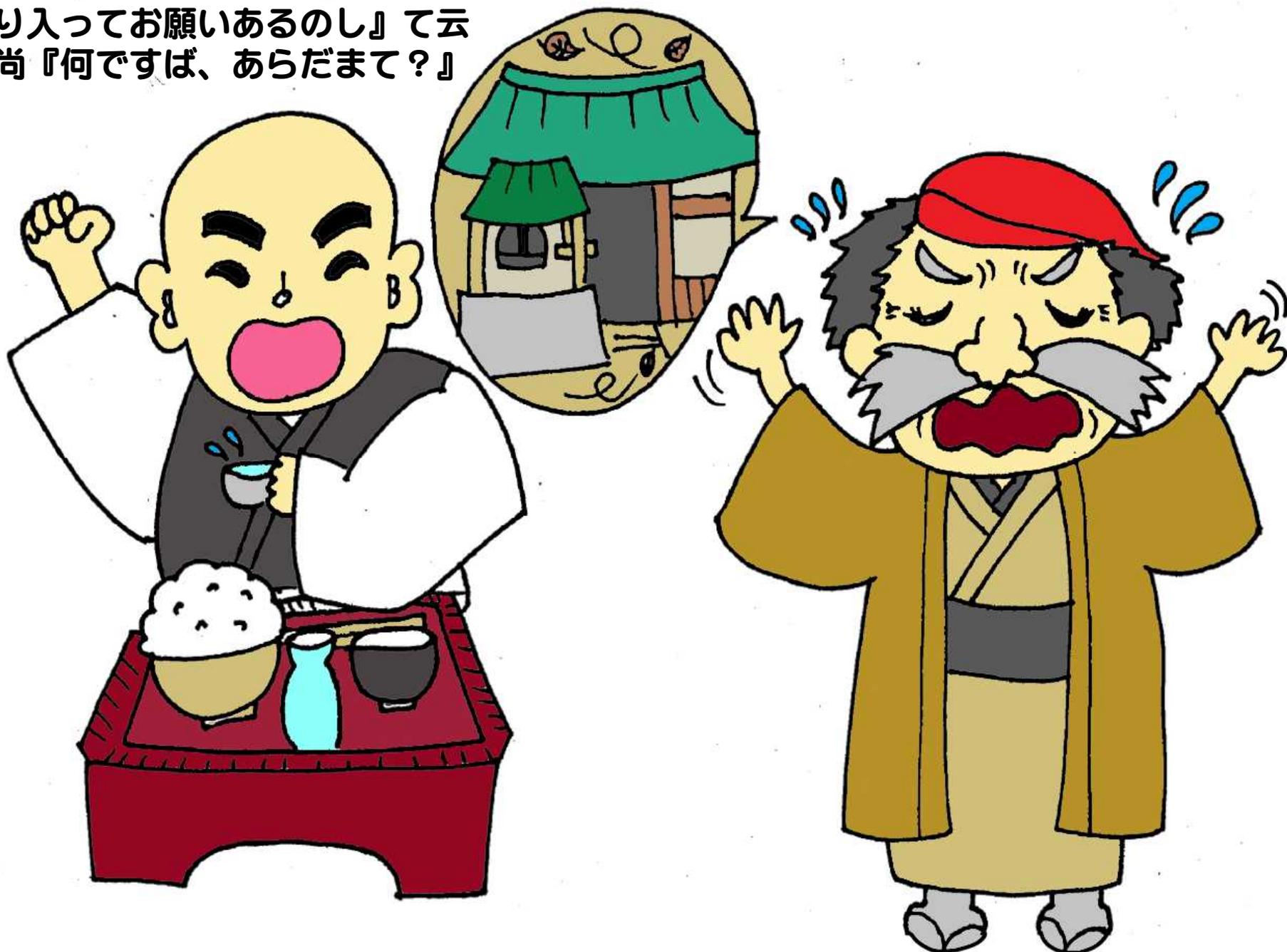
国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ



昔、ある村の東の山さ、山寺あったんだど。
そこの寺、どったらだ良（い）和尚様来ても、
十日も住めば、いなぐなってるんだど。
村の人達、困てらどごさ托鉢してきた和尚様
あったど。

こりゃあいいあんべだど思（も）た村の庄
屋様、『和尚様、和尚様、まあ、あがれへ
じゃ』

て、家さあげて、飯（ま）を炊いで食（か）へで、『実は折り入ってお願いあるのし』て云（し）たど。和尚『何ですば、あらだまで？』

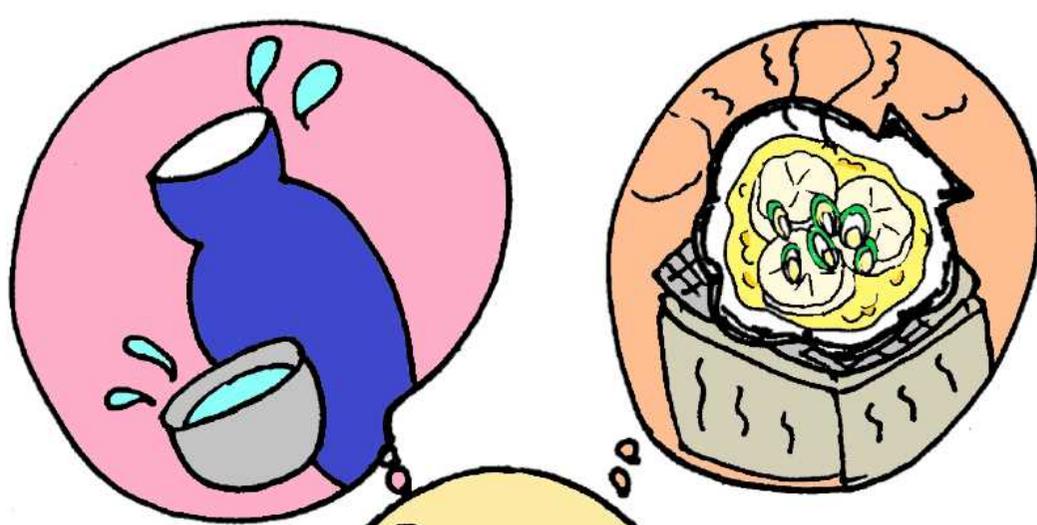


『ん、他でもねえ。実はおらほの村の東山さお寺あるんだばて、今、和尚様が居ねえのし、お前様（めさま）、何とかあの寺の住職になってけねべが』て頼んだ。

和尚は、びっくりよろこんで、『あらあ、有難（ありがで）えなあ。我（わ）だけんだ陪堂坊主（ほいどぼんず）とば住職にしてけるてが。えごすえごす、我（わ）さっそぐその寺さ行げさね』て、引き受けだど。



さあ、和尚ア、寺さ行って掃除もして、晩（ばげ）なったどごで、



『わい、今日は働いたじゃ。疲れだはんで、寝る前に、酒コ一杯飲んでから寝るべえ』てして、庄屋様から貰ってきた肴コど酒コで酒盛りコしてらだど。

たんげ夜も更けた頃だ、寺の門の方（ほち）から、カラソロンて下駄の音コア聞けで来たど。

『わい、この夜更けに、この山中（やまなが）の寺さ来たア、誰だべな』て云（し）て、ふっと見だきや、唐傘バさした綺麗がだだ若えアネコ二人居だよ、その二人、スツと本堂さ上がってきて、和尚のそばまで来て、

『おらだち、下の村の者ですおん。今日からこの寺さ、新しい和尚様来るて聞いだごで、始めだば淋しいと思（も）て、和尚様さおらぢじの歌コ聴いでもらて、踊りコも見でもらうと思（も）て来たんだおん。さあ、まんず、おひとつどうど』てお酌してきたど。



二人ア、代わる代わる歌コウだったり、踊りコ踊って見（め）へだど。『地震、雷 おこねぐねばて 土佐の高知の鬼犬怖（おこ）ね、 あらー、怖（おこ）ねじゃー、怖（おこ）ねじゃ』て歌った。夜中ぢゆ一歌って、踊って、夜明けたきや戻って行つたど。そして次の晩（ばげ）も、又その次の晩（ばげ）も、なんぼげりも来てせ、『地震、雷 おこねぐねばて 土佐の高知の鬼犬怖（おこ）ね、 あらー、怖（おこ）ねじゃー、怖（おこ）ねじゃ』て歌て、踊て、夜明けに戻るんだど。



和尚、何だかこれアおがしいなと思（も）た。『新しい和尚来たはんでて、こつたらに毎晩、毎晩、酒飲まへで、歌、踊り見（め）へだりすもんだな。始めアおもしろいと思（も）て、聞いて見でらばて、これア、何だか怪しいどごある。ひよっとへば、あの女共（おなごど）ア、妖怪変化だんでねべが？』と思（も）て、その晩（ばげ）ア、眠（ね）ねで考えた。



次の日の昼間、庄屋様の所（どご）さ行って、『庄屋様、庄屋様、我（わ）、どうしてもやらねばまね用事できませんでした。ついては、旅さでねばまいねはんで、何とか少し、暇コ下されじゃ』
『旅さ？どごまんでし？』
『あい、土佐の高知まで』
『土佐の高知？あつたら遠くまでが。したばって、必ず戻ってきてけへや。』て、餞別ば持たへでやったど。

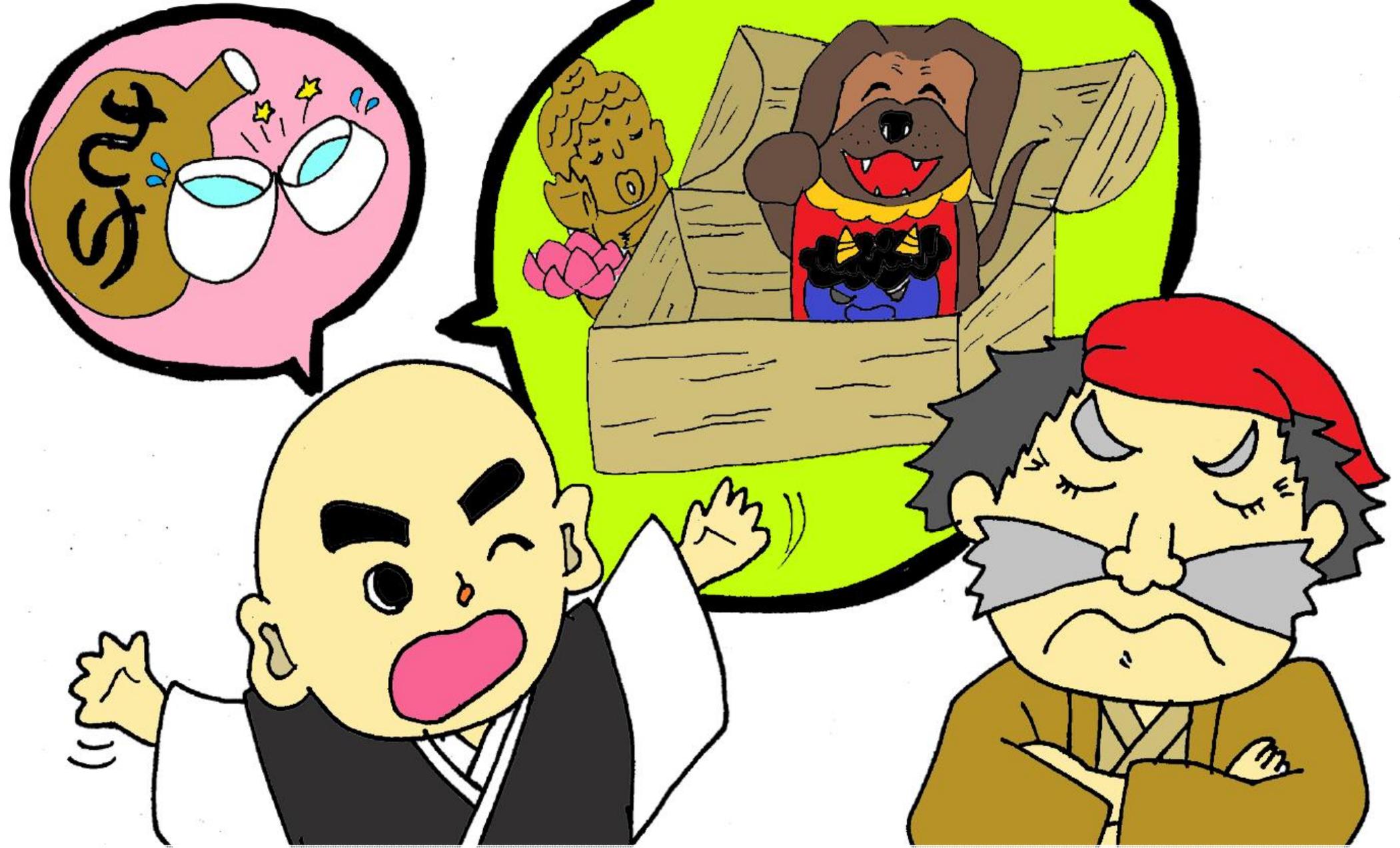
さて、和尚、長（なんげ）え旅してせ、はるばる土佐の高知までやってきたど。
茶店さ入って休んだ時、『このあたりに、鬼犬ズ犬ア居ねべが？』て聞いだきや、茶店の婆様
『ああ、鬼犬でやんすか。鬼犬ならほれ、そのすぐ先の、角の豆腐屋さんの犬でやんす。』て、
おへでけた。



豆腐屋さ行ってみだきや、店の前さ立派だ体格
した大（で）っただ犬ア、でんと座てあたど。



和尚様、飼い主の豆腐屋さ、訳ばを喋って、何とかその鬼犬ばしばらく貸してください頼んだど。豆腐屋の主人、その犬ば息子だけんて可愛（めご）がっていたもんだどごで、始めだば泣いて、ながなが、ウンてさなくてあった。したばって、はるばる北の国から長旅して来た和尚様のたっせの頼みであったどごでせ、とうとう断り切れねんで、鬼犬バ貸してやったど。

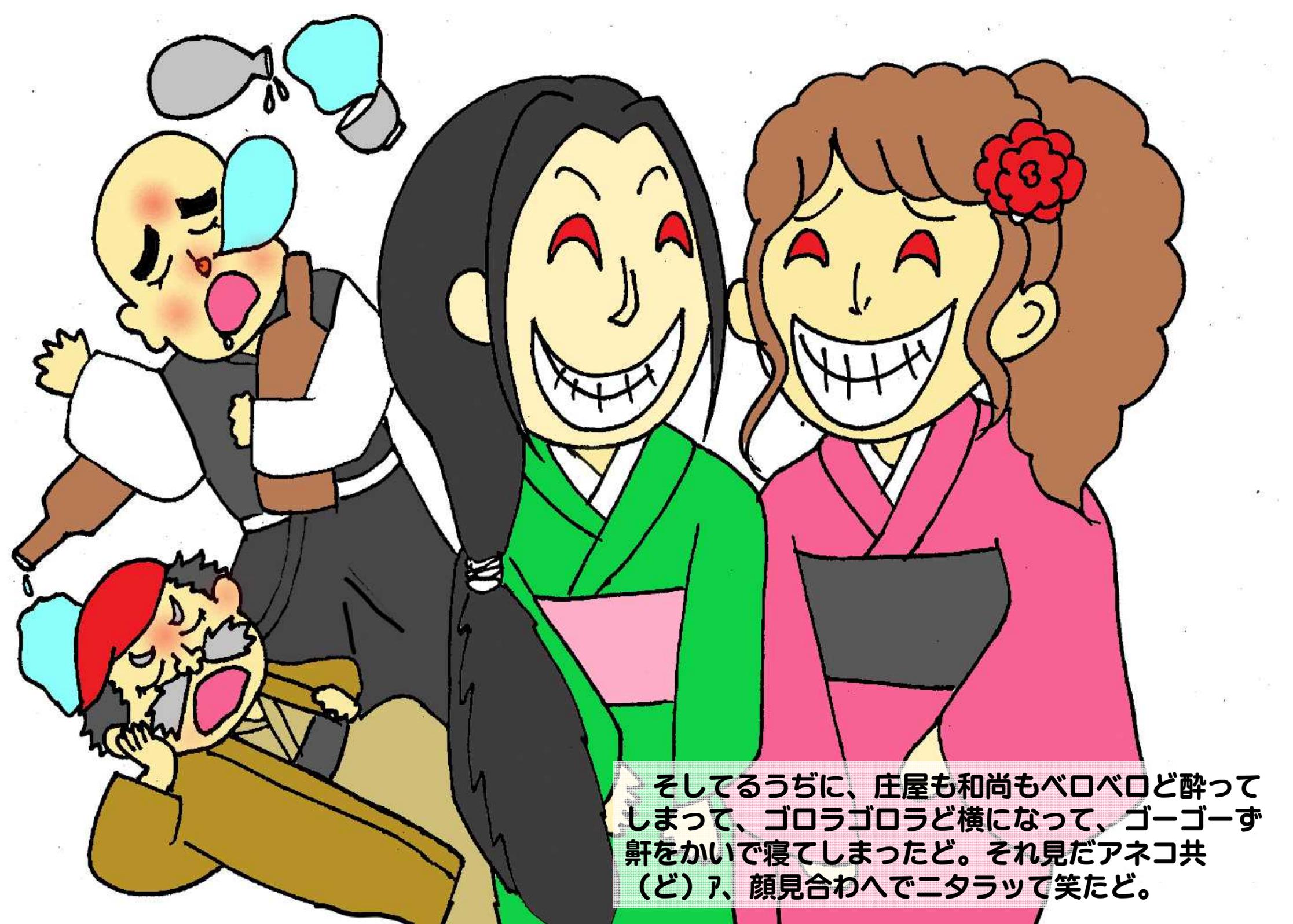


和尚ア、今度（こんだ）又、鬼犬ど長え旅して津軽さ戻たど。帰ってから庄屋様さ、これまで起きだ寺の様子ばまでいね話した。『そういう訳でし、ほれ、我（わ）、土佐国まで行って、この鬼犬バ借りできたはんで、今夜は庄屋様も寺さ来て、我（わ）ど一緒に飲んで居でけへじゃ』て云（し）て、庄屋の家がら大（で）っただ箱運んで、その中さ鬼犬バ入れて、本堂の仏壇の陰さ隠（かく）しておいだずおん。

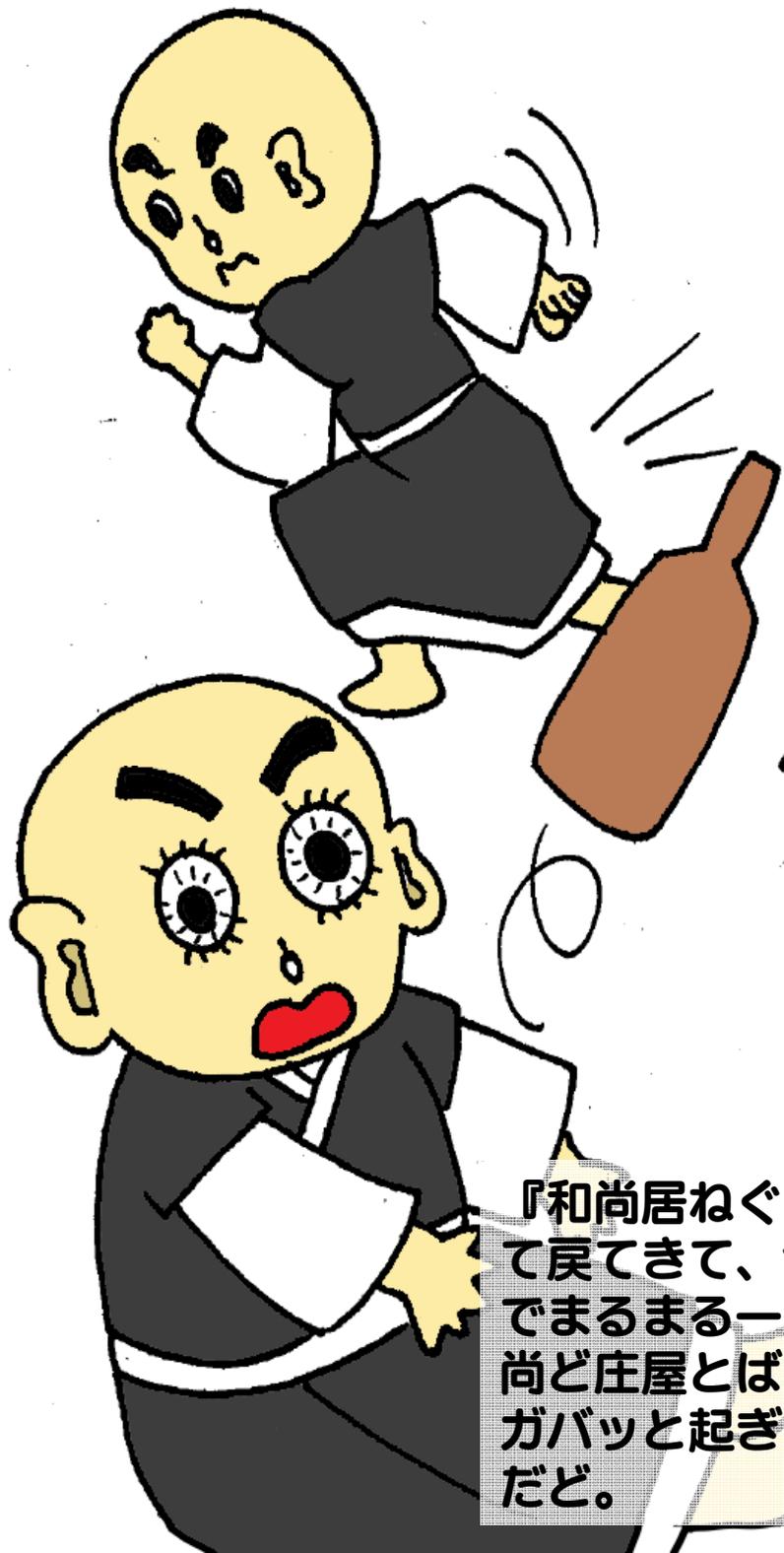
さあ、晩（ばげ）になった。
和尚ど庄屋、酒飲み始めだ
きや、ろオ・・・又（まん
だ）々、あのアネコ達ア、下駄
の音コ、カランコロソってさ
へで、唐傘コかぶて、やって
来たど。



『あれえ和尚様、しばらくだのお、どごさ行ってらのし？あれー、今日は庄屋様も一緒だでばし。
へば、又賑やがにやるべし。さあ、飲めへ、飲めへ』て、お酌バしたど。庄屋様『今日は和尚様、
長え旅が無事戻った祝いの酒だ、さ、お前（め）だじも飲め、飲め』て、
アネコ娘さも、うって飲まへだ。



そしてるうちに、庄屋も和尚もベロベロど酔って
しまって、ゴロラゴロラど横になって、ゴーゴーズ
躰をかいで寝てしまったど。それ見たアネコ共
(ど)ア、顔見合わへでニタラッて笑たど。



『和尚居ねぐなって、残念だ事したど思ってからきや、又（まんだ）こうして戻てきて、今夜は庄屋も一緒だ。これア、棚がらぼた餅だ。今日は一人でまるまる一人ずつ食うべし、ヒヒヒ……。』てして、アネコ共ア和尚ど庄屋とば喰いにかがったど。と、その時だ、眠（ね）てらはずの和尚ガバツと起きで、本堂の裏さ走（は）けで行って、バツと箱の蓋開げだんだど。



鬼犬、ダーツと飛び出してきた。二人のアネコさ次々どドツと飛びかがって、喉笛バ ブッチ、ブッチど噛み切ったど。血がドバーと吹いで、アネコ共ア、『ギャーアアア』で叫んだきや、見る見る顔（つら）つきなも変ってまで、そごさドーツと倒れた。したきや、ろおー、その二人ア、年いった猿の化け物であったど。

次の日の朝間、村中の者を集めて、寺バまでいね掃除して、床下ば見だきゃ、二匹の化け物猿アなんぼ人喰ったもんだがさ、この寺さ泊まった人の骨、ジャック、ジャックど出できたど。





昔ア、人も獣もみんなお互い住み分け合って暮らしてらもんだ。この話コア、人間の住み家（か）に入ってきて、人さわるさした猿の話だ。したばって、今だば、人の方が獣の住むどごさ、むたむたど入って行って獣ば次々ど殺してる。

獣から見れば、今だば人間の方が、この二匹の猿の化げ物だけんたもんだがも知らねえな。